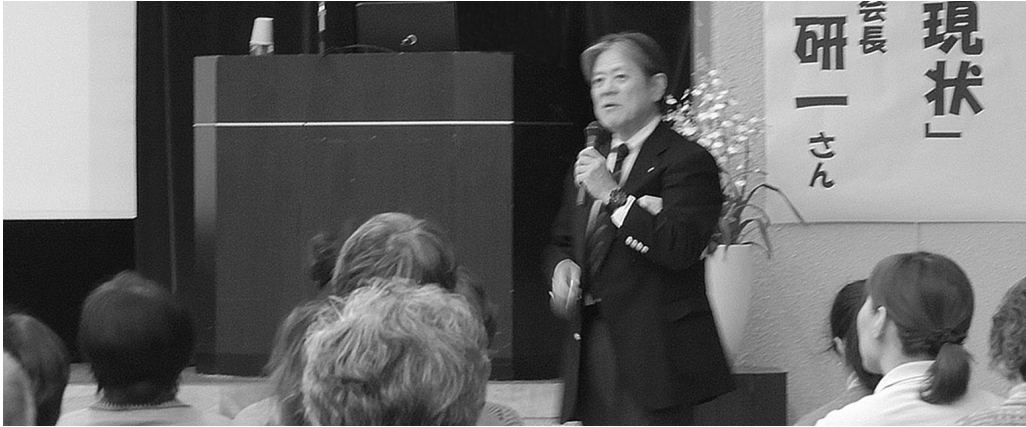


ひととひとのフォーラム足利2016 第2部

講演会 「日本の医療の現状」

足利市医師会会長

なかや
中谷 研一さん



さきほどご覧になられた「あん」という映画のテーマである「らい病」という病気では、かつて悲惨な生活を送られた人々が多くおられました。私自身も知らないような昔の話です。また、「結核」という病気も、かかった人には物を売ってもらえない、その人の家の前では息を止めて走る…というような差別が行われていました。

皮膚に特徴的な病変が現れました。さらに筋肉の委縮、運動障害などが加わることで、その外見上の變形から「神仙により断罪された者」とか、あるいは「前世の罪業の因果を受けた者」などといった、悲しい偏見が持たれてしまいました。

「核」を除きこれらの感染症は、多くの場合において完治することができる病気となりました。

平均寿命と健康寿命

平成22年度における平均寿命は、男性で79.64歳、女性は86.39歳となっており、日本国民が男女とも諸外国に比べて長生きであることを示しています。近年、人生の最後まで第三者からの介入を受けずに生きる「健康寿命」という考え方が提唱されるようになってきました。

らい病

この「らい病」は、抗酸菌の一種である「らい菌」の感染による慢性感染症であります。1873年にノルウエーの医師であるアルマウエル・ハンセン氏により発見されました。感染力が非常に弱く、実は自然免疫だけでも防御できたのですが、潜伏期が非常に長かったため、小児期に感染した場合には成人になって発症することもありました。

また、「結核」による偏見から起こった実際の事件としては、1938年に岡山県で発生した大量殺人事件である『津山事件』があり、横溝正史の『八つ墓村』のモデルとなりました。

非常に残念ですが本日ご来場の多くの方は、私自身も含めて、今から対応しようとしても既に手遅れかも知れません。専門のスポーツジムなどに通い

詰り、肉体を改造するしかありません。そういった身体的な問題がある一方、加齢に伴う認知機能障害や気分障害である「鬱(うつ)病」などの精神的な問題、そして、独居や経済的困窮といった社会的問題もあり、これらを改善しない限り健康寿命は延びていきません。

現在、日本は超高齢社会であり、85歳以上の4人に1人は認知症といふこととなります。足利市の65歳以上の高齢化率は30%、人数的には4万5千人以上となっており、栃木県でもハイレ

高齢社会と認知症

症状としては、末梢神経・皮膚・自律神経・筋の障害があり、驚(わし)手・猿手といった四肢の奇形が発症して、

正確な医療情報があれば、起こらなかった悲劇であり、患者であつても人間らしく生活できたはず。人権は無視された過去があつたことを、我々は忘れてはなりません。

さて、現在では「らい病」や一部の「結

核」を除きこれらの感染症は、多くの場合において完治することができる病気となりました。

現在、日本は超高齢社会であり、85歳以上の4人に1人は認知症といふこととなります。足利市の65歳以上の高齢化率は30%、人数的には4万5千人以上となっており、栃木県でもハイレ